



## 故郷唐津の古民家宿泊と

## 新たな出会いと誘い

金丸弘美

食総合プロデューサー

母・金丸美恵子の十三回忌で久々に佐賀県唐津からつ市に帰郷した。命日は12月26日。

近松寺きんしょうじでの法要を無事に執り行うことができ。参加いただいた方のお返しは、母がお客さまがおみえになるとき、お茶とともに愛おしく出していた香川県の三谷製糖羽根さぬき本舗「和三盆」。お茶が好きだったので唐津市本町の明治5年からの老舗「中川茶園」にお願いした「八女茶」と「嬉野茶」。それに長男・金丸知弘の著作『子育て世代のための快適移住マニュアル』（誠文堂新光社）。本には唐津の家やお祭りの料理や母の思い出が書かれているからだった。

今回の帰郷では江川町の明治11年築で144年の歴史ある民家をゲストハウスにした「CALLALI」に長男とともに宿泊した。というのも実家は企業の宿舍として貸しているために泊まることができなからだ。こちらを紹介してくださったのは私の実家のお隣に住む建築家の菊池郁夫さん。古民家の再生活動を手掛けていらつしやる。

法要を終え「CALLALI」に行くと、1階の座敷で10数名の方がお茶を飲んでいらつしやつた。近所の方で、ご子息の成人のお祝いをされていたのだという。そのなかの年長の方から、突然大きな声を掛けられた。「あんた『えんや』書いた金丸さん！」。

『えんや写真集・唐津くんち』（家の光協会1992年刊）のことで、写真家の英伸三はなぶさしんぞうさんにお願ひし4年をかけて作成した祭りのドキュメンタリーだ。タイトルは祭りだしで山車（唐津では曳山ひきま）を曳くときの掛け声からきている。唐津くんちは11月2、3、4日に行われる秋祭り。各町内にある江戸末期から明治初期に作成された14台の華麗な漆塗りの曳山が巡行する。

「CALLALI」のある江川町は「七宝丸しちほうまる」という龍の美しい曳山があるのだ。

母が健在の頃、毎年、唐津くんちに家族で帰郷していた。祭りのことを本にしたい。そこで英さんに相談し祭りの準備からハレの日までを追いかけた。そこには子供たちや料理を作るお母さん、笛や太鼓を練習する少年たち、祭りの勇壮な男たちとそれを支え見守る人たちが多く登場する。



唐津の曳山。「鯨（じゃち）」と「七宝丸（しちほう丸）」

実家で出していた唐津くんちの料理



「CALLALI」で声を掛けてくださった方が「ちよつと家から本を持ってくる」と持参された「えんや」は、もう何度も読まれたのだから表紙もなぐボロボロになっている。

サインを頼まれ本を囲み記念写真を撮ることとなり「えんや！」の掛け声があがった。成人式のご本人は「あつ。小さい頃、観ていた本だ！」と言われ、ほかの女性の方からは本に登場する人のことが語られと「どの家にも本があるよ」と一気に話がもりあがり、一瞬にして、みなさんとの一体感が生まれた。どの方も初めて会う方ばかり、その中の一人の女性からは「うちも本あるけど、もうぼろぼろで、あと一冊、買ってあげばよかったあ！」と言われたのだった。

本には母も我が家の祭りの料理も登場し、母が亡くなる前に、ずっと病床のベッドで繰り返し観ていたのが「えんや」だった。唐津の祭りの日は、曳山のある町内の多くの家で、もてなしの料理が登場する。家によっては300名近くの料理が出てくる。器には唐津焼、有田焼などの大皿が使

われる。我が家では、叔母・高田多恵子さんを中心に母や姉妹、従妹たちが手伝い料理を作った。鯛の姿煮、栗の渋皮煮、酢豚、ゴマ豆腐、ごぼうのキンピラ、ニンジンのキンピラ、蛤はまぐりの塩焼き、はるさめ・卵・ハム・きゅうり・きくらげの五色中華和え、

ツガニ（モクスガニ）・サザエ・エビ・サトイモなどをそれぞれ大皿に盛ったもの。ツガニをぶつ切りにして炊き込んだ蟹飯。タラの胃、ごぼう、昆布の含め煮。とらほの三色蒲鉾。エビ・白身魚・エソの五色揚げ。それらの料理が母とともに映っている。今も、町の人達が写真集を大切されていたのかと思うと、もう体が震えるほどの出会いとなつて、母の導きかと思えた。

泊まった「CALLALI」を運営しているのは、徳永明寛・友紀さん夫妻。舞台照明をされていた方。明寛さんは福岡県出身。友紀さんは岐阜県出身。唐津に来るつもりはなく、家を探しているうちに、菊池郁夫さんのホームページで江川町の古民家を知つて、持ち主から借りてリノベーションを手掛け、カフェとゲストハウスとして福岡県の糸島からの二拠点の暮らして再利用を始めた。予定では唐津に越して暮らすとのこと。建物は800㎡もある木造の古民家。中に入ると大きな土間になつていて畳敷きの広間に繋がっている。隣に和室があり、奥に灯籠ちまぐらのある日本庭園がある。徳永さんは、できる限りそのままに雰囲気を活かし簡易民泊を手掛ける一方で、カフェとイベントスペースとして使い、絵、マリオネット、クラフト、音楽会などを開いていると言う。その際に近所の人を招待してきたことで、地域の集いの場となつている。その佇まいの風情に惹かれて海外や古民家ファンの女性たちが訪れていた。新たな出会いと視点を開眼させられた「CALLALI」。

翌日、まちづくりの活動グループ「からつ夢バンク」の大石町の小島起代世さんに誘われて中町の集いの場「酒処萌」に伺った。そこで小島さんから「『えんや』は娘たちの教本になつているの。ぜひ復刊して。応援しているから」と言われ、今、復刊を夢見ているところだ。